# 秘密の関係

比佐　遥

# 秘密の関係

「本当にいいんだな」と念押しする男の言葉に、
「ええ、殺るしかないわ。確実に病死と診断されるこの薬を使って・・・」
ベッドの上から窓の外を眺めながら、女はぼそっと呟いた。
それっきり二人は言葉を交わすことなく、ホテルの暗い部屋は、静寂に包まれた。

「あなた、早く起きてよ。もう8時過ぎてるのよ。」
桜井彩（さくらいあや）は、まだ眠っている夫の充（みつる）に大声を張り上げた。なぜ、毎日、自分で起きられないのか、本当にいらいらしていた。
新聞記者の夫は、そこそこの給料を稼いできてはくれるが、ほとんど家におらず、いても眠ってばかりで彩の不満は爆発していた。結婚して3年、子供はいない。最近では、この結婚は失敗だったと、彩は確信するに至った。
ばたばたと何とか夫を家から送り出すと、彩は一通りの家事を済ませ、出かける準備を始めた。念入りに身支度をして・・・

正午少し前に、島田達也（しまだたつや）は、ホテルのロビーに到着した。待ち合わせの時間には少し早かった。辺りを確かめたが彼女の姿は見あたらなかったので椅子に座って待つことにした。達也はベンチャー企業の社長をしている。経営自体は今ではほとんど部下任せだ。以前ほどではないが業績は好調で、生活は派手な部類である。時間の自由もわりときく。今日も、昼間から人妻とデートを楽しむところだ。
達也には結婚して5年になる妻の千佳（ちか）がいる。とてもやさしい女性だが、達也の生まれ持った浮気癖は一生治ることはないだろう。
正午を5分ほど過ぎたところで、達也はロビーに彩の姿を見つけた。

夕方6時、充は少し緊張した面持ちでパーティー会場にいた。注目のベンチャー企業の創立5周年記念パーティーの取材だ。社長の島田とは初対面だが、彼の妻の千佳は、5年前までは充の部下で、一緒に仕事をしていた。
立食パーティーが始まり30分ほどたった頃、島田社長が、赤ワインの入ったグラスを２つ持って充に近づいてきた。
「本日は、お忙しいところありがとうございます。妻の千佳が大変お世話になっています。どうぞゆっくりしていってください」
「本日は、5周年記念パーティーおめでとうございます。奥様には大変お世話になっています」
充は、島田社長からグラスを1つ受け取り、ワインを少し口にした。
島田は、招待客から声をかけられ、充に軽く会釈をするとその場を去っていった。

夜10時過ぎ、島田達也は、自宅に戻った。妻の千佳が出迎えた。
「今日の、パーティーはどうでした？」
千佳は、体調が優れず、パーティーには出席していなかった。
「以前の上司が来ていたぞ。確か昔お前が惚れていた男だ・・・」
更に言葉を続けようとしたその時、達也は急に心臓を押さえ苦しそうに倒れ込んだ。
「やっと、あなたとお別れできるわね。あなたの浮気にはうんざりだったの」
千佳は、もがき苦しむ達也を見下ろしながら、冷たく言い放った。
千佳は、夫の浮気について、充に色々相談していた。そのうち、二人は昔の関係に戻っていた。そしてついに達也を殺害することを決意した。今日のパーティー会場で、確実に病死と診断される薬を、充が達也のグラスに盛ったのだった。
充の方も夫婦仲が悪く、もうすぐ離婚することになる。晴れて千佳と充は人生をやり直すことができるわけだ。
「うー・・・」達也は、何かを必死になって言おうとしているが言葉にならず、次第に力尽きてぐったりした。
千佳は、わざと慌てた様子で救急車を呼んだ。

病院に着いた時には死亡が確認された。心筋梗塞との診断だった。

翌朝、千佳の携帯に充から電話があった。
昨夜、千佳の方から電話をした時には充は出なかった。
千佳は、昨日の達也の死の興奮が覚めない様子で電話に出た。
「はい、千佳です」
電話の向こうからは女の声がした。
「充は、昨日、死んだわよ。心筋梗塞でね」
そう言うと電話は、一方的に切られた。

電話を切ると彩は呟いた。
「あなたたちの関係も計画も全てお見通しなのよ。浮気性の達也にはかわいそうなことをしたけど、よく働いてくれたわ。」

テーブルの上には保険金受給の申請書があった。

# 秘密の関係

http://p.booklog.jp/book/71454

著者：比佐　遥
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hhpuboo/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/71454

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/71454

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ